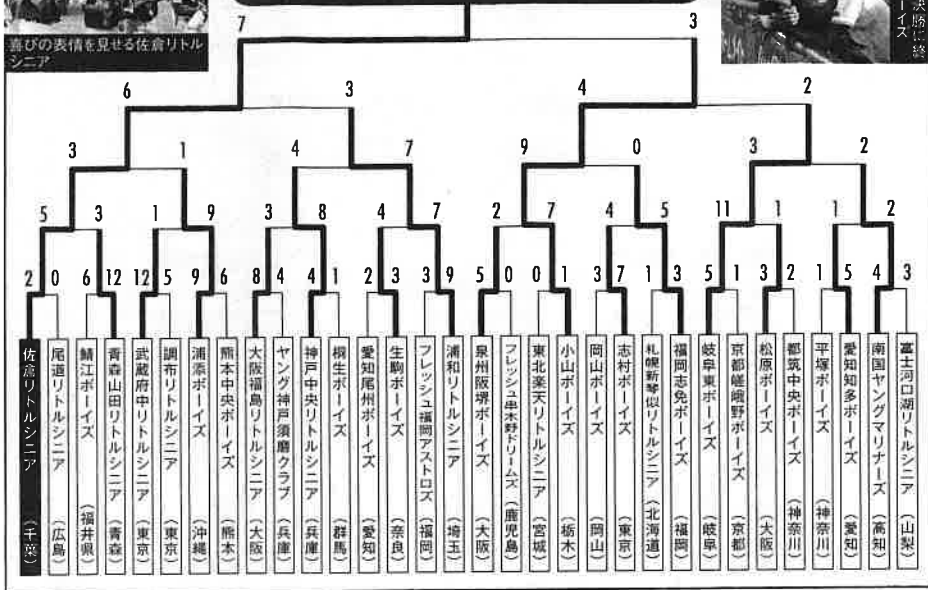




優勝=佐倉リトルシニア (千葉)



悔しくも抑えきれず、泣いた小山ボーイズ

過去10年の優勝チーム

- 2007年 ジュニアホークスボーイズ (大阪)
- 2008年 オール枚方ボーイズ (大阪)
- 2009年 世田谷西リトルシニア (東京)
- 2010年 オール枚方ボーイズ (大阪)
- 2011年 飯塚ライジングスターボーイズ (福岡)
- 2012年 湘南クラブボーイズ (神奈川)
- 2013年 枚方ボーイズ (大阪)
- 2014年 佐倉リトルシニア (千葉)
- 2015年 羽曳野ボーイズ (大阪)
- 2016年 湘南ボーイズ (神奈川)



昨年の覇者は、関東ボーイズ界の雄・湘南ボーイズ。4年ぶり2度目の優勝だった

い中、よくここまで来られました。もともと野球はボールゲームなので、笑ってプレーできるところが強いと思います。それが最後までできました」と選手たちをねぎらった。また主力として引つ張った南雲も「元気が最後までできました。感謝の気持ちでいっぱいです」と目を光らせながらも、清々しい表情で語った。

延長の激戦

準決勝第2試合は、ボーイズリーグの全国大会で春夏連続準優勝の小山ボーイズと、初出場ながら準々決勝で南国ヤングマリナーズとの接戦を制して勝ち上がった岐

決勝戦イニングスコア&バッテリー

TEAM	1	2	3	4	5	6	7	計	H	E
小山ボーイズ	0	0	0	3	0	0	0	3	6	2
佐倉リトルシニア	0	0	1	0	0	6	X	7	11	1

小山 仲三河一中山

佐倉 諸隈一京極

戦評

終盤の逆転で佐倉が勝利

先制したのは佐倉。3回裏に8番・京極壘と9番・高橋雅也の連打で1点を奪う。直後の4回表に小山は、5番・上戸鎖光のスライズ、6番・朝井優太のヒット、7番・小林武都のスライズで3点を奪い逆転。しかし、佐倉は6回裏に5番・西川僚祐が2点本塁打を放って同点にすると、その後も2番・古滝友哉の適時内野安打、3番・度会隆輝の押し出し、4番・高田海斗の2点適時二塁打で4点を追加し再びリードすると、最終回をエースの諸隈惟大が締めて試合終了。

リトルシニア、ボーイズ、ヤング、ポニー、フレッシュユと中学硬式5連盟がリーグの垣根を越えて日本一を争う真夏の熱戦。今大会、予選を勝ち抜いた32チームの頂点に立ったのは佐倉リトルシニアだった。

8月14日〜19日 (東京ドームほか)

リーグの垣根を越えた熱戦 佐倉リトルシニアが3年ぶり優勝

第11回全日本中学野球選手権大会 ジャイアンツカップ



最後までスタイルを貫く

準決勝第1試合、浦和リトルシニアと佐倉リトルシニアの対戦は初回から試合が動いた。浦和リトルシニアの先頭・南雲吉太が投手強襲安打で出塁すると犠打と相手投手の暴投で三塁まで進み、3番・中井大我の犠牲フライで先制。全米選手権にリトルシニア日本代表として出場し優勝した2人が初回から貴重な役割を果たした。だが、中盤にリトルシニアの全国大会で春夏優勝、夏準優勝の佐倉リトルシニアが底力を見せる。4番・高田海斗が右中間を破る三塁

打を放つと、内野ゴロの間に生還し同点。さらに続く諸隈惟大がレフトへ二塁打を打ち、中継が乱れている間に一気に生還。相手守備のスキを見逃さずに逆転した。

さらに6回には、主将の西川僚祐の2点タイムリーで突き放す。その裏に浦和リトルシニアも南雲と山戸拓弥の連続タイムリーで2点を返すが、佐倉リトルシニアは7回にも高田と諸隈のタイムリーで2点を加えてダメ押し。投手陣もエース左腕の諸隈を登板させずに、四十住皇輝と藤田修の左腕リレーで試合を締めた。

敗れた浦和リトルシニアだったが、品田聡一監督は「エースの中林陸が右脇腹を痛めて本調子でな

# 優勝おめでとう！ 佐倉リトルシニア



◎優勝チーム  
ベンチ入りメンバー全選手紹介

1 諸隈惟大 (3年)	10 堀井遥斗 (3年)
2 瀬川悠人 (3年)	11 四十住皇輝 (3年)
3 高田海斗 (3年)	12 竹内亮太 (3年)
4 度会隆輝 (3年)	13 藤田修 (3年)
5 高橋雅也 (3年)	14 菊地レハン (3年)
6 角田勇斗 (3年)	15 京極壘 (3年)
7 西川僚祐 (3年)	16 小澤拓海 (3年)
8 古滝友哉 (3年)	17 大野栄瞬 (3年)
9 清水祐希 (3年)	18 石田慶一 (3年)

## 優勝キャプテンインタビュー

(同点本塁打は) ボール際だったので打った瞬間は「入るのかな？」と思ったのですが、感触と打球の角度はよかったです。入ってよかったです。苦しい展開でしたが主将という立場なのでチームを盛り上げないといけないという気持ちがありました。この大会で優勝することを入団した時から目指していたので、本当にうれしいです。(中学野球生活に点数をつけるなら) 優勝できたので100点です。中学野球に悔いはないので、高校でも頑張ります。



## 優勝監督インタビュー

決勝戦の6回は、西川に「思いきって振ってこい。狙ってこい」と言ったらホームランを打ってくれました。大会を通して、エースの諸隈以外に藤田、菊地、四十住ら2番手以降の投手が頑張ってくれました。準決勝で諸隈を使わずに勝てたことが大きかったです。この選手たちが入ってから日本一を目指してやってきたのでうれしいです。リーグの垣根を越えたジャイアンツカップで優勝することが真の日本一だと思って、ずっと狙ってきました。



## 決勝戦オーダー

- ① SS 角田勇斗 (3年)
- ② CF 古滝友哉 (3年)
- ③ 2F 度会隆輝 (3年)
- ④ 1F 高田海斗 (3年)
- ⑤ LF 西川僚祐 (3年)
- ⑥ P 諸隈惟大 (3年)
- ⑦ RF 清水祐希 (3年)
- ⑧ C 京極壘 (3年)
- ⑨ 3F 高橋雅也 (3年)

## チームデータ

- 大会出場回数 : 4年連続6回目 (前身大会を入れると7回目)
- グラウンド所在地 : 千葉県佐倉市直弥
- モットー : 粘り強く、最後まであきらめない野球
- 学年別部員数 : 94人(3年29名、2年27名、1年38名)
- 練習日 : 週2~4回
- 練習時間 : 土日祝7時間、平日2時間
- スタッフ : 伊藤昌弘会長、松井進監督、松井英次郎助監督、大木浩司コーチ、田村一雄コーチほか

## 中学野球太郎が選ぶベストナイン&各賞

<b>外野手</b> <b>西川僚祐</b> (佐倉リトルシニア・3年) 決勝で逆方向のライトスタンドに起死回生の同点本塁打	<b>外野手</b> <b>星憂芽</b> (小山ボーイズ・2年) 準決勝でランニング本塁打、決勝で3安打の活躍で貢献	<b>外野手</b> <b>朝井優太</b> (小山ボーイズ・3年) 決勝戦できっちりスクイズを成功。投手としても貢献大
<b>遊撃手</b> <b>角田勇斗</b> (佐倉・3年) 正確な守備と巧みな打撃。2回戦では貴重な本塁打も	<b>二塁手</b> <b>度会隆輝</b> (佐倉リトルシニア・3年) 苦戦した初戦で貴重な本塁打を放つなど要所で活躍した	<b>一塁手</b> <b>高田海斗</b> (佐倉リトルシニア・3年) 不動の4番打者として優勝に貢献。決勝ではダメ押し打
<b>三塁手</b> <b>小倉奨真</b> (小山ボーイズ・3年) 強肩強打の3番打者。投手としても準決勝で好救援した	<b>投手</b> <b>諸隈惟大</b> (佐倉リトルシニア・3年) 1回戦でノーヒットノーラン、決勝戦で3失点完投勝利	<b>MVP</b> <b>西川僚祐</b> (佐倉リトルシニア・3年)
<b>捕手</b> <b>二村颯馬</b> (岐阜東ボーイズ・3年) 4番・捕手、そして主将を務め初出場で4強入りへ導く	<b>敢闘賞</b> <b>南雲壱太</b> (浦和リトルシニア・3年)	<b>新人賞</b> <b>星憂芽</b> (小山ボーイズ・2年)

## 雨降って新星現る

昨年の大会に続き雨天が多く、1日順延となって準決勝から東京ドームが使用された今大会。中学野球では軟式・硬式共通で「1日7イニングまで、2日で10イニングまで、3連投不可」という投球回数制限ルールがあるため、各チームはただでさえ悩む投手起用にさらに頭を抱えることとなった。特に優勝した佐倉リトルシニアは、8月15日の2回戦が3回途中で雨が激しくなり中断。16日の雨天順延を挟んで17日は2回戦の3回からと、準々決勝のダブルヘッダーで行われた。その中で救世主となったのが、これまで登板機会の少なかった右腕・菊地レハンと四十住(あづみ)皇輝だ。この2人で準々決勝を乗り切ると、準決勝では四十住が6回まで試合を作り勝利投手となった。これには松井進監督も「決勝進出は彼らのおかげ。真面目に頑張っていたから、最後の大会で野球の神様が素敵なプレゼントをしてくださいましたね」と笑顔で語った。

星から朝井がサード強襲のレフト前安打で勝ち越しに成功すると、その後も打線がつながり、大塚瑠晏のフライを相手野手が見失う間に2点を追加してダメ押し。8回は2番手の小倉奨真が1点を返されながらも反撃を振り切り、小山ボーイズが悲願の全国初制覇へ決勝戦に駒を進めた。

敗れた岐阜東ボーイズの矢口政人監督は「決して力のあるチームではなかったですが、みんな感謝の気持ちを持って戦えば、野球の神様が背中を押してくれると選手もわかってくれたと思います」と目を細めた。また、主将の二村颯馬も「厳しさの中に楽しさもある練習をしてきて、それが東京ドームで思いきり出せました」と涙ながらに語った。

**終盤の逆転劇で頂点に**  
 決勝戦はリトルシニアとボーイズの両雄による対戦となった。佐倉リトルシニアが終盤の6回に西川僚祐のライトへの同点本塁打で流れを変え、その後も猛攻を見せ、この回だけで6得点を挙げて逆転勝ち。3年ぶり2回目(前身大会を含めると3回目)の優勝を飾った。一方、小山ボーイズは全大会3大会連続で決勝で涙をのんだが、豊富な練習量で確かな足跡を残した。